

## 『両岸の旅人——イスマイル・ユルバンと地中海の近代』

東京大学出版会 2022年6月 324頁 3,000円+税

工藤 晶人

個人の伝記というミクロな視点から出発するグローバルヒストリー。それが当初からの企図だった。主人公となるイスマイル・ユルバンについてはすでに平野千果子氏による考察があり、フランス植民地史に関心をもつ研究者のあいだではそれなりに知られた存在である。だがそうした専門的な文脈を離れれば、やはりマイナーな人物というべきだろう。1812年生まれ、1884年没。南米の仏領ギアナで生まれ、フランスで教育を受け、サン=シモン主義者となり、エジプトにわたってイスラームに入信し、その後は通訳、行政官としてアルジェリアの植民地統治に携わった。母方から黒人奴隸の血を引いていたとされる。この短い紹介だけでも、1人の生涯のうえにいくつもの間大陸的な問題が折り重なっていることが感じられるだろうか。

本書は、イスマイル・ユルバンの事績と思想についていくつかの新解釈を提示してはいるとはいえ、伝記としてみれば大筋において国内外の先行研究を刷新するものではない。もしも若干の新しさがあるとすれば、伝記的な記述から世界史の一断面を描くという目標を四六判の小著に收めようとした無謀さにあるというべきだろう。無謀さゆえに、執筆には長い年数を要した。そのなかで転機となった2つの言葉を記しておきたい。まず思い出されるのは、前著の刊行からそれほどたたない頃にある人と交わした会話である。「落ち穂拾いはしないでください」。19世紀アルジェリアを主題とした前著の骨子を紹介しつつ、ユルバンの生涯を淡々と書き綴つていけば1冊の本になるだろうという軽い気持ちでいた私に、この一言は重くのしかかった。つぎにあげるべきは、別の研究会でユルバンについて報告したときに、主催者の方がふともらした一言である。「これはこれで麗しい社会史なのかもしれません……」。厳しい激励だった。ユルバンの生涯を紹介するだけでテーマの大きさを感じさせるだろうという見込みは甘かった。それを読者の感じ方に委ねるのではなく、著者の言葉で問題の広がりと奥行きを明確に記述しなければならない。グローバルヒストリーを掲げる叢書の一冊として書かれるからには当然のことだが、個別の事例を追いかけることに専心してきた著者にとっては大きな壁を感じられた。

苦心をするなかでしだいに膨らんでいったのが、ユルバンが出会った人々や、同時代の状況を別の立場から経

験した人々の群像劇という側面だった。本誌の記事で以前に紹介したことがあるレオン・ロシュは、そうした登場人物の1人である（「レオン・ロシュの回想録について」『地中海学会月報』2019年3月）。もう1つの苦労は、ユルバンが旅したそれぞれの土地の歴史を書き、さまざまな地域のつながりから世界史の新たな布置を浮かび上がらせるという試みだった。そのためには、ユルバンがその土地を訪れた当時の状況だけではなく、長い時間のなかで背景を繙かねばならない。一例をあげれば、南米の仏領ギアナの歴史を、ユルバンが生まれた19世紀初頭の状況を説明するだけでは足りない。17世紀のフランス人による入植地建設にさかのぼっても不十分である。これがグローバルヒストリーであるためには、短い数節ではあっても南米先住民の歴史から説きおこさなければならない。さらに例をあげるとすれば、ヨーロッパ人航海者の海外進出を世界史の転換点とする常識的な見方にも別のまなざしをむけることが可能である。本書のなかで紹介したように、大洋の彼方への想像力はアフリカの人々のあいだにも存在していたのだから。

こうして、主人公の生涯に複数の時間軸とまなざしを交差させるという構成が固まつていった。読者に遠回りを強いるようだが、そこに著者としての狙いがある。一世代のなかの多様性というイメージは、ふりかえってみれば、少年の頃に魅了されたバージェス貢岩に由来している。教科書的な進化のプロセスにあてはまらない化石動物群、現生する生き物とのつながりが議論される、異形の生物たちである。本書がめざしたものは、忘れられてきた歴史のオルタナティヴを発掘するという意味で、こうした生物群の発見に似ていたのかもしれない。

歴史記述のあり方について、ナタリ・ディヴィスの作品群が念頭にあったことについては別稿で述べた（『UP』2022年10月）。リュセット・ヴァランシ、吉田静一、市井三郎、日野龍夫らの著作から得た示唆も大きい。最後に、本書の原稿を出版社に提出した後に刊行されたため残念ながらその成果をふまえた補筆を施すことができなかったが、中山裕史氏の『幕末維新期のフランス外交：レオン・ロッシュ再考』（日本経済評論社、2021年10月）から多くの新知見をあたえられたことを記しておく。